立教国際シンポジウム
Rikkyo International Symposium

立教大学

1985

Rikkyo University

立教大学－シカゴ大学共同シンポジウム

「戦後日本の精神史――その再検討」

戦後日本の歴史はすでに40年の歳月を数え、その年輪は日露戦争の勝利から第二次大戦敗北までの日本近代史の厚みに匹敵します。この間、日本は敗戦の絶望と混乱から民主化と近代化の嵐を経て経済成長と繁栄の時代に入り、一転して低成長と高齢化の時代に伴なう諸問題をかかえた成熟社会に到達しました。

この戦後の節目ごとに、戦後日本の歴史をそれなりに総括しようという動きがありました。それは、現実の政治の動きと微妙に交錯しながら、今日では戦後のすべてを精算しようという主張さえも生まれています。しかし、この40年の歴史が日本の近代史のなかで、全体としてどのような位置を占めるのかについてのバランスの取れた研究は、未だそれほど多いとは言えません。とりわけ精神史の領域においては、ジャーナリスティックな文章は雑誌などにあふれていますが、本格的な研究はきわめて僅かです。本シンポジウムは、日本およびアメリカの第一線の研究者を動員して、この領域にはじめて本格的な鍬入れをしようと志すものです。

精神史とは、ここでは哲学や政治の理論から経営や労働の思想、そして文学や芸術、大衆文化にいたるまでの広い領域内での精神活動全体の歴史を指しています。激動の時期にふさわしく、戦後日本の精神史は、きわめて多彩な活動や営みにみちています。しかし、その内容は、現実の政治過程や経済過程に比べれば、海外に知られることはすくなかったといえるでしょう。他方、日本の国内においても、戦後の精神史は、めまぐるしい状況の移り変わりの中で、あまりにも時代に即して次々と処理され、それを再評価しつつ日本の新しい伝統として定着する試みは、決して十分だったとはいえません。そして、その過程を同時代的に先進諸国と、あるいは同じように“戦後”を体験した他の諸国と比較検討する試みにいたっては、未だほとんどなされていないといって過言ではないでしょう。今、アメリカの日本研究者たちが戦後日本の精神史の全体像をとらえようと企て、日本の研究者たちがそれに応えて、共同討議の場をもとうとすることの基本的な意味も、ここにあります。

立教大学と**シカゴ大学**は、これまで長い研究交流の歴史をもって緊密に結ばれてきました。このたびシカゴ大学を中心とするアメリカの日本研究者たちが、このテーマについて日本側の研究者と共同でシンポジウムを開催したいと企てたとき、開設111周年を迎えた立教大学がそのホストたることを引受けたのは、決して偶然ではありません。しかし、また、本シンポジウムは決してシカゴ・立教両大学の研究者だけのものではありません。両大学は、この機会に真にシンポジウムを実りあるものにするために、両大学の範囲をこえて日米両国における第一線の研究者を招集することに力をつくしました。会議の成果は、日米両国で同時出版されることが予定されています。この意味で今回の会議は、戦後日本の精神史の研究において、新たな里程標となることが期待されているのです。

シンポジウム　プログラム

12月18日（水）

9：20〜9：30　**開会式　挨拶　高橋健人　立教大学総長**

9：30〜11：30　**第1セッション　「戦後日本精神史の基本構図」**

テツオ・ナジタ　「不在の承認── 戦後の政治・文化批評における“自然”」

神島二郎　「現代日本の精神構造」

キャロル・グラック　「戦後と歴史意識」

13：00〜15：00　**第2セッション　「戦争体験とその後」**

山田宗睦　「戦後の戦争歌」

ナオキ・サカイ　「死と詩的言語」

大江健三郎　「戦後文学から今日の窮境まで── それを経験してきた者として」

15：30〜17：30　**第3セッション　「戦後の思想状況」**

ビクター・コッシュマン「戦後初期の議論における否定性と主体性」

渡辺一民　「戦後思想の見取り図」

ウィリアム・ラフレール　「瓦礫と理性── 戦後における和辻哲郎の哲学的位相」

12月19日（木）

9：30〜11：30　**第1セッション　「ナショナリズムのゆくえ」**

松本三之介　「戦後思想と竹内好」

ハリー・ハルートゥニアン　「ポスト・モダンの暗示」

杉山光信　「戦後ナショナリズム論の一側面」

13：00〜15：00　**第2セッション　「戦後日本社会の構造と意識」**

三戸　公　「日本的経営と〈家〉」

牛窪　浩　「戦後における労働組合の『民主化・近代化』」

ノーマ・フィールド　「悲惨な島国のパラドックス」

15：30〜17：30　**第3セッション　「欧米のインパクトと戦後日本」**

ヨウイチロウ・ナンブ　「アメリカから見た日本の科学」

高畠通敏　「60年安保体験の意味」

マサオ・ミヨシ　「誰が決断し、誰が語っているのか。戦後日本における西洋と主体性」

12月20日（金）

9：30〜11：30　　第1セッション　「大衆文化に映し出された戦後の精神史」

鶴見俊輔　「庶民生活における娯楽」

ウィリアム・シブリー　「20世紀文学におけるアメリカ像と日本像」

佐藤忠男　「戦後民主主義と日本映画」

13：00〜15：00　　第2セッション　「高度経済成長社会の精神史」

アラン・ウルフ　「2つの自殺をめぐって ── 大宰・三島と近代化」

前田　愛　「1970年の文学状況 ── 古井由吉『円陣を組む女たち』をめぐって」

栗原　彬　「住民運動と民衆理性」

15：30〜17：30　　第3セッション　総括討論

立教大学－シカゴ大学共同シンポジウム記念公開講演会

ノーマ・フィールド　「悲惨な島国のパラドックス」

テツオ・ナジタ　「遊戯と美徳」

司会　前田　愛

12月21日（土）　13：30〜16：00　**立教大学9号館**　**入場無料**

参加者リスト

［日本側］

立教大学

栗屋憲太郎	松平　誠	大江健三郎	作家
戴　國煇	門奈　直樹	加藤　典洋	評論家
前田　愛	神島　二郎	佐藤　忠男	評論家
渡辺　一民	栗原　彬	杉山　光信	東京大学
住谷　一彦	高畠　通敏	鶴見　俊輔	評論家
三戸　公	五十嵐暁郎	松本　健一	評論家
牛窪　浩	北岡　伸一	松本三之介	東京大学
武沢　信一	ポール・マッカーシー	山田　宗睦	関東学院大学
本間　康平	鈴木　範久		

［米国側］

アラン・ウルフ	オレゴン大学
キャロル・グラック	コロンビア大学
ハリー・ハルートゥニアン	シカゴ大学
マサオ・ミヨシ	カリフォルニア大学・バークレー
ナオキ・サカイ	シカゴ大学
ノーマ・フィールド	シカゴ大学
テツオ・ナジタ	シカゴ大学
ビクター・コッシュマン	コーネル大学
ウィリアム・ラフレール	カリフォルニア大学・ロスアンジェルス
ウィリアム・シブリー	シカゴ大学
ヨウイチロウ・ナンブ	シカゴ大学

ジョセフ・キタガワ(北川三夫)博士のシンポジウムご参加のお知らせ

本学出身で、今年までシカゴ大学教授・同大学神学部長をつとめられたジョセフ・キタガワ(北川三夫)博士は、健康上の理由から来日が懸念されていましたが、このたび最終的に今回のシンポジウムにもご参加下さることが決まりました。

長年の間、立教大学とシカゴ大学との交流にご尽力されてきたキタガワ博士が、両大学による共同シンポジウムにご参加いただけることは、この上ない喜びです。

キタガワ博士は12月20日㈮の第3セッションにおいて、以下のテーマで特別報告される予定です。

12月20日（金）

15：30～17：30　　**第3セッション**
ジョセフ・キタガワ**「戦後日本の宗教」**

The participation of Dr. Joseph Kitagawa, the former Dean of the Divinity School of the University of Chicago and an alumnus of Rikkyo University, had long been uncertain due to the condition of his health. It is with great pleasure that we announce his participation in this symposium.

Dr. Kitagawa, who has continued to make great efforts for the intellectual exchange between the two universities, will make a special presentation during the third session on December 20th(Friday). His topic is as follows:

December 20, (Friday)

Session III
15:30 —17:30
Joseph Kitagawa　　Religion in Post-War Japan